

# 年少組、第一保育期

—満四歳から満五歳—

## 生活訓練

### 第九週

雨季に入る。外の生活が妨げられ勝ちになる。子さも達  
ごんなに外へ出たいこゝであらう。先生も、ごんなにそう  
させてやりたいこゝであらう。シノウで、大降りの日には、  
子さも、歸らめて部屋の中へ閉ぢこめられてゐる。時には、

小さい顔が窓に列んで、スチーブンソンではないが

雨がお庭に降つてゐる

滑り臺にも降つてゐる

ジャングルジムにも降つてゐる

お山の上にも降つてゐる

ふき薄日が庭を斜めにさす。兩脚がまばらになつて來

る。小さいステップソン達が思はず小雨の中に飛び出す

のは斯ういふ時である。先生も大抵なら笑つて見てゐてや  
りたい。が、ねらしてはならぬ大切な子である。今日はい  
いこしても、それが癖になられては始末がつき難くなる。  
そこで「出ぬこゝ」にするのである。

これは、これだけのことである。大して深い道徳的意義も  
何もない。蛙幼稚園でないから已むを得ないだけの訓練事  
項である。たゞ、こゝで一つ考へられるこゝは、訓練こし  
て子さもの生活に禁を加へる場合、その多くの場合、子さ  
もの氣になつてやりたいこゝである。先づ、子さもの氣  
になつてかゝつてやりたいこゝである。前に、庭の草花の  
ところでも言つた如く、さぞ取りたからうございふ察しをも  
こにして、そこから出發させて、しかし取つてはいけない

さいあこなになるのである。小雨の庭に飛び出したい心もちも、じきによつたら、小雨だから尙ほ飛び出したい心もちも、よく／＼察した上で止めるのではなくてはならない。そうでない法律になる。お巡りさんになる。訓練ではなくなる。先生ではなくなる。こゝは訓練といふことに於て極めて大切なことである。勿論、そんな察しを一々子どもに言ふ譯ではない。言ふのではないが、それは通せずにはゐないのである。それが通じるこゝに、訓練の眞の教育性が行はれるのである。つまり、すべての人間行爲が、實は相當の内部葛藤をもつてゐるものであることを、生かした上での禁令になるからである。たゞ禁止さへすればよい。禁止出来るといふだけなら、子どもの手足を鎖につなげばいい。それは心をも、實に心をも鎖つなぎにするこゝに他ならない。訓練でもなんでもありはしない。

扉の開閉を靜にするといふ習慣は、實に生活そのこゝに對する縛けである。ドンミあけて、ドンミしめる。扉がこはれるばかりでなく、その室内の空氣がこはれる。水の中でそんな亂暴が行はれたら、水は搔きまはされて仕舞ふ。

水の波動のやうに、空氣の振動が見てないからこいつて、内部にそんな動搖を與へてはならない。中では友達が静かに繪を描いてゐる。静かにお話を聽いてゐる。時にはあの小さい哲學者が冥想に耽つてゐるかも知れない。あの小さい詩人がアネモネの紅い花瓣の散るのを悲しんでゐるかも知れない。扉はそつとあけ、そつとしめなければならぬ。こゝらが、小さい者に教へたい、生活のつゝましやかさである。

## 第十週

今日は晴れた。砂場は繁昌、大脳はひである。男の子の大活躍に對抗してではあるまいが、女の子達は大きく産を數いて、まゝごとに夢中である。——遊ぶだけ遊んで、後はそのまま歸つてゆかうとする子等のために、いつでも後かたづけをして下さる先生は優しい。「い、んですよ。そうしてお置きなさい。後は片づけて上げますよ」。なんといふ先生なんだらう。年に一二度は、そうした優しみを子どもにしてやりたい。「い、の、先生、うつちやいこいでいゝの。片づけなくていいの。——すみませんね、先生……」こ

子さもは感じらるだらう。但し、それは、平生自分達で片づけるこゝに習慣のつけられてゐる子さも達に限ることである。人に後片づけをさせて平氣であるやうな癖のついてゐる子さも達には、そんな氣は樂にしたくも起らない。此の際、訓練されてゐない子さも達は、或るこゝを出来るようになれてゐないばかりではない、あたりまへのこゝを感じるこゝが出来なくなつてゐる子さもである。

## 第十一週

こゝがまた空欄になつてゐる。無訓練週間にあらざるこゝは前にも言つた通り。しかし斯うして解説を試みてゐるこゝ、空欄を作つて置いたこゝが少し變にも感じられて來る。元來訓練の各週割當がそう嚴密なものでないから、時時空欄の週が出ても不都合でない譯だが、空欄にして置く程厳密にその週を考へなくとも、何かしらありそうなものにも考へられる。こゝ之れは私の獨りごとである。さうぞ皆さんは、さしつかえ此の空欄をいゝものでうめて下さい。

がなあさいふもの。

幼児の方の抽斗といふのは、多分机の抽斗ではない。そ

この幼稚園でも、抽斗つきの重い机は人々に與へてあ

## 第十二週

抽斗の整理といふことになつてゐるが、之れは一體誰への注意かな。はつこして、自分の抽斗をあけて見て、更にはつこして、急いでその抽斗をしめ仕舞ふ先生が、さこの幼稚園にもお幾人かるらつしやりそゝである。勿論その數は幼兒の數より少ないが。さゝで、その人が自らおつしやるこゝには、「でも忙しいんですもの……」。たしかにそれに相違ない。しかし、そういうへば、子さも達だつて忙しい。先生にこつてだけ、忙しいこゝが言ひ譯にはならない。そこで私は、そつこその先生に、いゝ言ひ譯のしかたを教へてあげる。「子さも時の時からその訓練がされてゐなかつたもんだから……」。勿論、今頃になつてこんなこゝを大きな聲でいへる譯のものではないが、小さい聲でそつこいふのなら、御尤もな理由でないこゝはない。そして、「だから皆さんは、小さい時からよく整理の癖をつけてお置きなさい」といふ言葉が、その下の句として生きても來るだ

るまい。するに、戸棚の抽斗であらう。それも、自ら整理するにあるからは、共通の抽斗ではなく、各自の抽斗であらう。私達の「銘々戸棚」といつてゐるのがそれである。私達がその必要を言ひ出してから、今日では殆んど、どこの幼稚園でも行はれてゐるところの銘々戸棚である。そこで序に、この戸棚のことを一寸申して置くが、これに二つの目的がある。第一には、自己の所有品といふ観念をもたせることがである。第二には、その自己の所有品を自分で整理させるといふことがである。つまり、此の戸棚があるから整理といふことが起るのでなくて、整理の訓練のために此の戸棚が考へられたのである。従つて、整理の訓練がけられず、少くともその點に先生の注意が行き届かなければ、此の戸棚はその最初からの目的を達しないのである。極言す

れば、銘々勝手に亂雑にさせることがになつて、却つて訓練上有害になる位である。但し、こゝに一つの重要な問題は、根が自己的所有觀に基いてのこゝであるから、整理を整理としての純なこゝでないこゝがないといへない。少くも、共同品に對する整理といふことは、異つた實質を混じてる。そこで、一方、幼兒の年齢に即して、自己の所有といふ本能的な基礎によつて訓練してゆくと共に、そればかりでなく、共同の、言ひかへれば、自分の所有でないものに對しても整理習慣を併せ訓練することが必要であらう。但し、萬一その子が餘りに神經質で、潔癖といふやうなところのある子であつたら、そこは少し加減を要するといふもあるかも知れない。